

演劇事典出版から現在まで

皆吉郷平 野池恵子

研究会が発足した当初は、テキストを集めるのがいちばんの苦勞であった。ユーロではなく、1フラン70円ほどの頃だったからマイクロフィルムを買うのにもそれなりの予算が必要であった。予算ばかりではなく、橋本さんも回想しているように目当ての書籍を入手するには、フランス国立図書館（BN）のカタログを繰ってその書籍の番号を探すことからはじめ、面倒な手続きをふんでかなりの時間をかけなければならなかった。研究会が発足して50年たった今になってみるとなんとという簡便さだろうか。一連の作業をして入手していたテキストが、あつというまにパソコンにころがり込むようになったのだ。

メンバーはスタート時には数人であったが、何年かして気づいてみれば、伊藤先生の研究室には時に椅子が足らなくなる位の大勢が集まるようになっていた。また出身大学も多様で、合計してみれば10をゆうに越える所から17世紀演劇を研究する者たちが参加するようになっていた。大学間の垣根は最初からなく、おもに専門の話と芝居の話が私たちを結びつけていた。2005年には早稲田大仏文の Odile Dussud さんの研究室が拠点となり、また明治大の萩原芳子さんの研究室にも時に応じて集まり、若い世代の参加者も増えた。

1630年代の戯曲を中心に、逐語訳をしたり、担当者が内容の報告をしながら、また別にテーマを選んでその研究発表をしたりするうちに、研究誌の発刊が必要となり、「エイコス」一号が誕生した。論文や研究ノートを載せ、巻末にはそれまで読んだ作品の解題と梗概を掲載した。巻末資料がある程度の数に達したころ、梗概集だけを別途出版したらどうかという声があがった。

早稲田大学演劇博物館が21世紀GCOE人文科学分野の研究拠点に選ばれた関係で、2007年から2011年までの5年間17世紀フランス演劇研究会もその活動の一端を担うことになった。毎月の活動の他に、様々な講演会やイベントを企画し、たとえば〈レトリック〉を演技や色彩などまで広げて考える研究発表や、当時としては珍しかった女性作曲家ド・ラ・ゲールの紹介を音楽の分野の専門家に依頼して行い、なかなか聞くことのない実際の演奏も視聴することができた。パスカルが演劇に無関心ではなかったことを塩川徹也氏の講演で知ることになった時も蒙を啓かれた思いであった。

GCOEの活動の中でも一番のハイライトは、演劇事典を全員で執筆したことにある。今まで書きためた作品の梗概集を中心におき、それを膨らませる形で、取りあつかう作品を増やしたほか、全体を作家、作品、事項にわけて説明を加えて、17世紀特有の興味深いテーマを解説したコラムも挿入した。

予算がおりてから出版までの時間が短かったので、終わってみれば扱いそこねた作品も多く、内心忸怩たる思いが強い。いくつもある残念な思いの中に、女性の戯曲作家の作品集が出版されて、優秀な作品が簡単に読めたにもかかわらず、彼女らの作品をひとつもとりあげなかったことなどが

ある。なぜろくに上演もされず後世にも話題にならなかったのか、当時の社会との関係で考えようとしていたののである。事典の増補改訂版を出版しなければならないという思いが強く持ち上がる所以だ。

GCOE の多様な活動の流れを受けて、アレクサンドランを現代の発音と当時の発音の二様で朗唱するワークショップを設けたり（2012年）、キノーの朗唱法を考察する講演会を催したりし（2016年）、テキスト訳読以外の活動も実施したが、それ以降は、コロナの影響もあり、もっぱらテキスト訳読に集中するにおよんでいる。

今回のエイコス 20号に載せたキノー『芝居じゃない芝居』の翻訳は、最初は研究室にて対面で議論を重ねながら用意されたが、後はズームでの勉強会で行われた。ズームは随分と不便な面が多かったが、それでも長崎やパリのメンバーも参加できるという大きなメリットもあり（たまに名古屋からの参加もあった）、毎回徹底した探求がなされた。Dussud さんご自身が17世紀の辞書をあれこれ調べ、適切な説明をみつけた後に、それに基づいて日本語担当側はぴったりの訳語を選ぶという時間のかかる訳読だったが、きわめて実りの多い努力であった。

私たちのグループは今は大学院の学生から経験豊かな研究者まで各年代が揃っている。が、昨今の大学のカリキュラムをみると、一般教養科目が激減しており、第二外国語を丁寧に学習する機会が情けないほど少なくなってきている。大学できちんと訳読を教えるところが減って行くと、我々のような研究グループも存続を危うくされかねない。しかし、文学を読むということは作者から提示されたことに対して、自分はどうか考えるかを絶えず自問することでもある。批判精神を養いものの見方を形成させてくれるものであるから、エイコスはその意味ではまだまだ続いていかなければならない。訳読と研究発表を両輪として地道に努力を重ねていく必要がある。